

随筆



四季

大城 喜寿郎

常夏の邦とか、緑の島等々南国ムードの気候が強調されすぎるせいか「沖縄には四季がない」とよく云われる。春夏秋冬、自然はそれなりに季節のうつろいを一生懸命にも告げているというのに我々が余りにも忙しすぎてそれに気がつかないのか、またはそれに鈍感になってしまったせいなのか。

冬：ヤマトから友人がやって来た。暖かな緑の島を想像してやって来たのに、どんよりと雲った寒空を見上げてがっかりした様子であった。旧暦十二月八日頃：いわゆる「ムーチービーサ」の時分は寒波が襲来し海は大しけとなる。寒さが一段と強さを増し灰色の曇がたれこめて薄暗い日がつづく。今にも雨が降り出しそうだ。冷たい風が骨身にしみる。一年中で最も寒い時期だ。そう云えば昔のガキ大将はこの時期にはきまって鼻水を垂らし、手足のあか切れに血をにじませながら元気よく風の中をとびまわっていた。

沖縄の早春は野や畑に若ミンナが出そろふ旧正月頃にやってくる。あのみずみずしい柔らかな芽をみていると春の息吹きを感じられ、やがて訪れる「ウリズン」の季節へのプロローグを演じているようだ。春はまだ浅いが、竹やぶの奥ではウグイスが鳴いていた。まだへたな鳴き声だ。どことなく頼りない。鶯の覚束なくも初音哉（正岡子規）、この時期の農家はサトウキビの刈り取りや積み出しで大わらわだ。製糖工

場は朝からフル操業だ。昔の工場は煙突からもくもくと黒い煙をはき出しながら出来たての黒糖の甘い香りをあたり一面に漂わせていた。今は先端技術の導入とやらでそのような情景はみられなくなった。

若夏の頃は気温は急に上昇し海はおだやかになり、温和な日がつづく。紅いデイゴの花が空に映えて美しい。風薫る季節。初夏に吹くさわやかな南風のことだ。

夏本番：喧騒・酷暑の季節だ。暑さは沖縄の専売特許みたいだ。じりじり照りつける太陽に思わず頭がくらくらして気が遠くなりそうだ。騒々しい蝉の大合唱が一層暑さをかきたてる。この頃にはきまって台風の2～3個が暑中見舞いにやってくる。もっとも最近では島をさけて本土直行が多くなったようだ。台風一過空は晴れわたって、もくもくと入道雲がわきあがってくる。夏の夕立は突然やってくる。一天にわかにかき曇り急に風が出て来たかと思う間もなく雷鳴と共に雨が激しく地面を打ち続くが、長続きはしない。ほどなく雲の切れ目から陽が差しはじめ、今までの豪雨がうそのように晴れわたり涼風が吹きわたる。九月も末頃になると騒々しかった夏は遠ざかり風向きがかわり、ミーニシ（新北風）が吹く頃はさすがに朝夕涼しくなり、空気も澄んで空が高く感ずるようになる。サンバの大群一路南を目差して島の上空をあわただしく通過していく。風に乗って遠い所から子供たちの元気な歌声が流れてくる。運動会シーズンたけなわだ。この頃は水も冷たく感じられるようになり、朝夕しのぎやすくなる。夕闇の訪れと共にこうろぎの音が聞かれ、いかにも涼やかな気分になり秋の深まりを感じる。やがて季節風が雨戸をゆるがす頃いよいよ冬の到来だ。自然はまた冬仕度にあわただしくなる。



天体写真を
撮ってみませんか？

那覇市立病院
足立 源樹

先日、釣りをするため伊是名へ行きました。その日は台風2号が接近中で天気は下り坂でしたが、晴れていたのが昼間はルアー竿をふりまわし、夜にはビーチからタマン竿を出していました。空を見上げるとさそり座と天の川がきれいに見えていました。その天の川にカメラを向けて何枚か写真を撮ってみると、結構きれいに撮影出来ていました。タマンは釣れないし、台風で帰りのフェリーが出なくなりそうで翌日早々に本島に帰ってきたりと大変でしたが、きれいな星空を見て写真も撮れたので満足のいく旅でした。

沖縄では別に離島に行かなくても、夜釣りをしなくても、ちょっと郊外に行けばきれいな星空を見ることができます。この星空を写真に撮りたい！と思ったことはありませんか？“天体写真”なんて難しいと思っているかも知れませんが、まずは簡単どころから始めてみませんか？

では、何があればいいのでしょうか？カメラがないと撮る事はできません。どんなカメラでもよいのかというとそういう訳ではなく、長時間シャッターを開けておくことのできる機能（バルブ機能という）が備わったカメラが必要になります。一眼レフではおそらくどのカメラでも大丈夫だと思いますが、コンパクトデジカメではこのバルブ機能はついていないものが多く、天体写真の撮影には適していないことになります。なぜこのバルブ機能が必要かというと、天体写真では暗い被写体を撮影するため長時間シャッターを開けておかないと何も映らないということになるからです。どのくらいシャッターを開けておくのかというと少なくとも30秒程度は必要になります。当然、暗い星雲なん

かを撮影しようと思えばさらに長く、30分とか1時間を超えるなんていうこともあります。ということで、最もお手軽に天体写真を撮ろうと思っても、バルブ機能の備わったカメラ（普通は一眼レフ）・三脚・レリーズの3点は必要ということになります。レリーズとはケーブル状のシャッターで、カメラに取り付けることによって本体のシャッターを遠隔で操作するための道具です。なぜ必要なのかというと、本体のシャッターを押すことによる手ぶれを防ぐためです。

この3点セットを持って晴れた夜にできるだけ町の明かりが届かない場所へ行ってみましょう。安定した地面に三脚をセットし、レリーズを付けたカメラを取り付けます。レンズは撮ってみたい方角の空に向け、シャッタースピードはバルブにしてあることを確認し、レンズのピントは∞（無限大）にしておきます。デジカメではISOという光の感度を設定することができます。ISOの数字が高いと光の感度が高く、弱い光でも写りますがノイズが増えてざらついた写真になってしまいます。天体写真では弱い光を相手にするのでできるだけISOは高くしておきます。普通は1,600とか3,200くらいでしょうか。あとはシャッターを切るだけです。30秒とか40秒間の撮影で結構きれいな天体写真が撮れます。もっと長くシャッターを開けておくとどうなるでしょう？10分くらいかけて写真を撮ってみればわかる事ですが、全ての星が北極星を中心に弧を描いている写真（小学生の頃、理科の教科書に載っていましたよね？）が撮れます。

上記の方法はものすごくシンプルなのですが、これだけで結構楽しめます。タイミングが合えば流星が写っていたりすることもあります。しかし、天の川なんかを撮っていると分かる事なのですが、なるべく長時間シャッターを開けていた方がよりきれいに写る（暗い星まで写るようになる、天の川も明るく写る）のに、そうすると星が点ではなく線になってしまうのです。長時間シャッターを開けていても星がち

ゃんと点で写る方法はないのかしら・・・と必ず思うようになります。そういう方法はちゃんとあるのですが、そのためには別の機材が必要になってきます。“赤道儀（せきどうぎ）”というもので、三脚とカメラ（あるいは望遠鏡）の間に存在するものです。

三脚とカメラ（あるいは望遠鏡）とつなぐ部分を架台と言い、これには大きく2種類あって“赤道儀”と“経緯台（けいいだい）”と呼ばれています。経緯台は縦・横に動かせるものですが、星の動きは地軸を中心に回転運動をしている為、これではきちんと動きを追うことはできません。一方の赤道儀ではその回転軸を地軸の傾きに合わせることができ（これには慣れが必要）、一度その軸をきちんと合わすことができればあとは何時間でも同じ星を追尾できるというものです。ですから長時間の撮影に際してはこの赤道儀に望遠鏡なりカメラを乗せて、モータードライブという星の動くスピードに合わせて自動的に赤道儀を回転してくれる装置を動かしておけば、先のやり方とは比べ物にならないようなすばらしい写真が撮れるようになります。

もっと欲が出てくると、今度は“星雲”とか“星団”といわれる物を写してみたくになります。ウルトラマンの故郷でもある“M78星雲”は有名ですよ！星雲・星団には比較的明るく・大きく観察しやすいものから小さく・暗く観察しにくいものまでたくさんあります。その中で

“メシエ天体”と呼ばれる星雲・星団があります。これは18世紀のフランスの天文学者が観測しカタログに記したもので、比較的安価な小型望遠鏡でも見ることができるのです。M1からM110までありますが、有名なものにはアンドロメダ大星雲M31、オリオン大星雲M42、プレアデス星団（すばる）M45などがあります。肉眼でも見ることができたり、双眼鏡・小型望遠鏡でも観察が可能ですが、それだけでは雑誌やインターネットに掲載されているようには見えません。やはり写真撮影が必要なのです。しかもこれらを撮影するには天体望遠鏡が必要です。望遠鏡にカメラを直接接続して30分とか1時間とかシャッターを開けておくのですが、長時間になればなるほど赤道儀の回転軸の設定に正確さが求められます。最近のデジカメでは撮影後、すぐにその写真が確認できますが、かつて私が高校生だった頃にはまだデジカメはなく、重い望遠鏡をかついで山に登ったりして写真をとっても、現像に出すまではどんな写真が撮れているかわかりませんでした。現像してみたら全部ピンボケだったり星が流れて写っていたりしてがっかり・・・なんてこともよくありました。

今は結構お手軽に天体写真が撮れます。ご家族でキャンプに行くなんていうときは絶好のチャンスです。ぜひトライしてみてください。



天の川（中央がいて座、右側がさそり座）



沖縄市場「美らちゅら」

同仁病院
池村 富士夫

5月初旬の日曜、とあるビヤパブで長野からの友人を迎えて、お酒を酌み交わす機会がありました。集まった7人は、40年来のつきあいで、申年の55歳。そろそろ定年の二文字や、物忘れ、切れの悪さに人知れず悩むおじさん達です。翌日は、皆仕事があるので、明るい時間から会は始まりました。例年になく早い梅雨入りで肌寒く、あいにくの小雨模様でしたが、何時からとは言えませんが、日の高いうちに飲み始めるビールはおいしい。暗くなってから飲むビールより確実にうまい、と感じるのは私だけでしょうか。

友人は16歳から毎年、沖縄にやってきて、多いときは年に2～3回、学生の際は長期休暇を利用して1ヶ月近く滞在していました。沖縄県の観光産業、経済に、かなり貢献して来たと言っているでしょう。

このような沖縄病に罹る人は、例えば「ダイビング」とか、「〇〇が好きだから」、と言う理由で訪れているようには見えません。単に沖縄が好きのように思えます。長野県民の彼は、40年前と比べて変わってしまった沖縄の風景だけではなく、本土の子と、外見や言葉使いや、いろんな意味で、違いが無くなった沖縄わらびの事まで心配します。どちらがウチナーンチュか、わかりません。たくさんある離島や史蹟についても私達よりかなり詳しいはずで

きっと、沖縄の匂い、文化が肌に心地良いのでしょうか。

今回、彼が来沖した目的は、沖縄の工芸品の調達でした。理由は、去年の忘年会での重大発

表です。正月まで、残り2日となった、年末の那覇市内の友人宅に、何故か長野在住の彼が鎮座していました。そこで一言。

「教員をやめて商売始める。長野市に沖縄県産品を置くアンテナショップを開くぞ。」

保守的な私は耳を疑いました。「・・・公務員一筋の人間が、商いなんて無理でしょう。」

しかし彼は「思いつきではなく、ずっと考えていたことだし、すでに場所も決めた。年齢や、諸事情を熟慮しても今しかない。」との事。店の名前は、「美らちゅら」。

店名を聞いて、2年前の居酒屋での飲み会に思い当たりました。その日もちょうど同じメンバー7人。違いは、土曜の夜で、ちゃんと暗くなるのを待って飲み始めたことです。その場所で、「沖縄をすぐイメージできて、誰もが納得する代表的なウチナグチを教えてください」と、彼が私たちに頼んだのです。「がちまやー」「わんからわんから」「美らさん」「ぬちどうたから」「なんくるないさ」・・・県人6人もいるのに、5個の単語しか出てきません。何故、これほどまでに方言が出てこないのか寂しいし、なんだか恥ずかしい。すると、1人が「我々は、方言を使うのは悪い事だと、学校で教えられた。」と言い出しました。そう言えばそうだった。

私の学校では、すでに消えていましたが、本部ンチュの彼は、「方言札」の洗礼を受けたことがあるとのこと。ウチナグチを使ったら罰則として、次の違反者が出るまで首に札をぶら下げる、あのシステムです。

たとえ方言札はないにしても、私たちの時代は、どこの小学校でも、「今日一日、方言を使った人、正直に手を挙げなさい。」と先生に言われたはずで

「ワンは絶対、方言は使っていません。」と先生に言って正座させられたし、バケツ持ちなどの古典的なペナルティーもありました。だから方言に堪能な人が周りに少ないんだ、と皆で合点しました。

方言をよく知らないウチナンチュ6人の、お勧めは「なんくるないさ」になりましたが、長野出身の彼の好みは積極的で前向きな姿勢を示す言葉と言う理由で（少し違う！）、「わんからわんから」でした。その日は方言札の話で盛り上がり大いに酔ってしまい、どの言葉を、彼が選んだかは覚えていませんでした。思うに、2年前のその時、長野の友人の突飛な質問は、店名を念頭においたものだったのです。

彼が、「美ら^{ちゅ}ちゅら」を店名に選んだということは、亜熱帯で、特にこの時期は蒸し暑いのですが、他府県の人にとって、沖縄の文化・風土には「きよらかさ」「うつくしさ」のイメージがあるのだと思います。

今後は彼のような「うちなー病」の人が、がっかりしないように、他所に無い魅力が何であるかを、我々がよく考え、気づいて次の世代に伝承し、さらに磨いていくべきでしょう。

一大決心で、沖縄をアピールする店「美らち

ゅら」を長野に開いた友人を応援する意味でも、またその店を訪れた人々が、実際に沖縄に足を運んでくれるようにするためにも、「美ら島、うちなゝ」で有り続ける努力をして彼の期待を裏切らないようにしたいものです。

6月に開店しましたが、皆さんも長野市に出張の際は、ぜひ沖縄市場「美らちゅら」（長野市問御所町ホテルJALシティ隣）を訪ねてアドバイスや、エールをお願いします。

